HASHI

回想
橋谷亮助と奨学会

YA

公益財団法人 橋谷奨学会

設立 40 周年記念誌

HASHIYA

回想
橋谷亮助と奨学会

橋谷亮助が昭和23年に創業した月島食品工業株式会社は、幾多の困難を乗り越えて、設立30年後には、国内業務用加工油脂の大手メーカーとして確固たる地位を築きあげていた。

この間、橋谷は社員の教育のため、事あるごとにインドネシアでの体験と創業後の苦労を語ってきた。年間売上額170億円、従業員数340名を超えようとした1981年、橋谷はこれまでの人生を振り返り、未来の月島食品のあるべき姿を見据えて一つの大きな決断をした。インドネシア留学生を支援する財団の設立である。

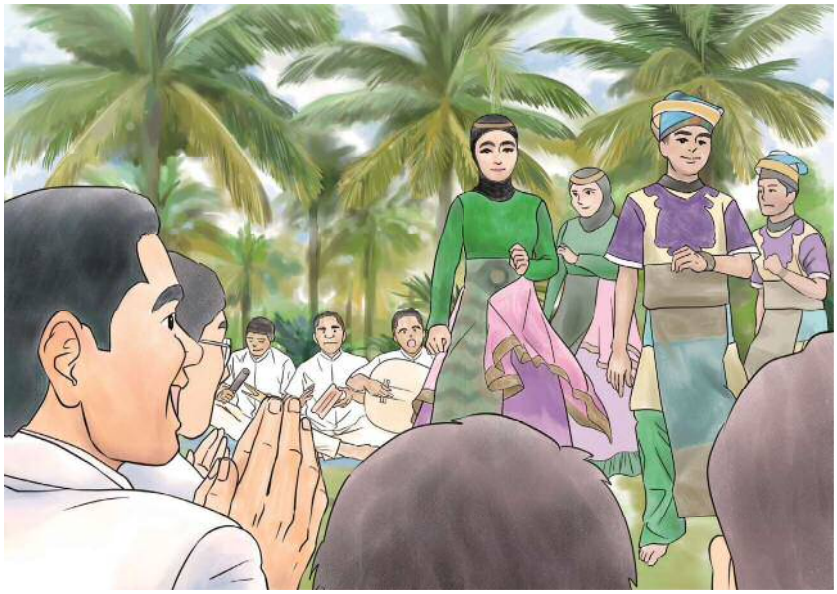
これは、様々な場面で橋谷が語っていた言葉を、月島食品の幹部への話として纏めたものである。

昭和46年のある日、月島食品の全国幹部会議での橋谷（はしや）社長の話

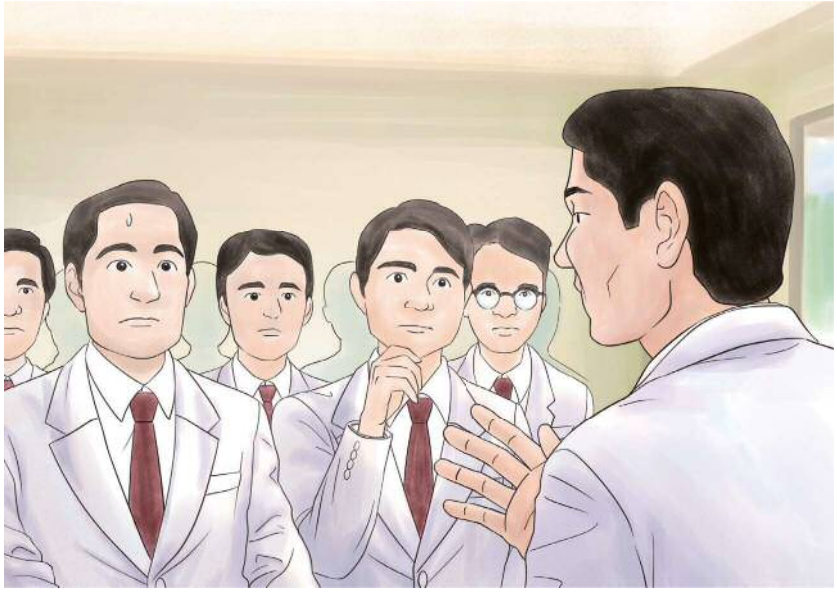
Pidato Presiden Direktur Bapak Hashiya Dalam Rapat Eksekutif Nasional Tsukishima Foods, Suatu Hari di Tahun 1981

今日は少し話が長くなるが、大事な話を皆にするので聞いてほしい。

ここにいる皆も知っているとおり、第二次世界大戦中、僕は南洋拓殖という会社の社員として、セレベス島で農業関係の仕事をしていた。横浜港を出港し、セレベス島のゴロンタロに着いたのは昭和17年10月だった。そのとき、ゴロンタロの住民たちから予想以上の歓迎を受けたんだ。



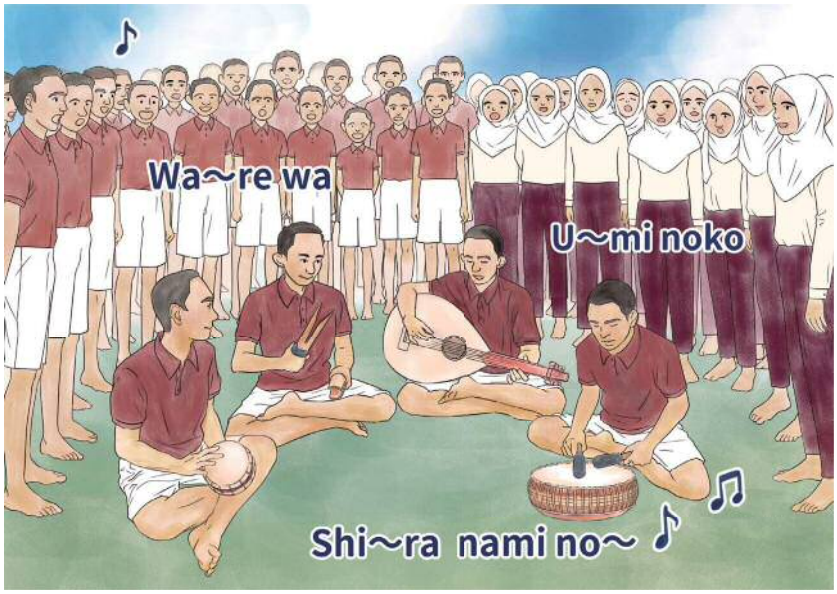
300年もの間、オランダの植民地であったため、彼らは十分な教育も受けられず、政治への参加も禁止されていたんだ。一番驚いたのは、彼らは農民でありながら肥料のことも全然知らなかったんだよ。肥料をやらないで稲を栽培していた。雨が降れば空気中の少しの栄養が落ちる。肥料はそれだけだから、単位当たりの収穫量は日本6分の1しかなかった。オランダはかれらに何にも教えていなかったんだ。



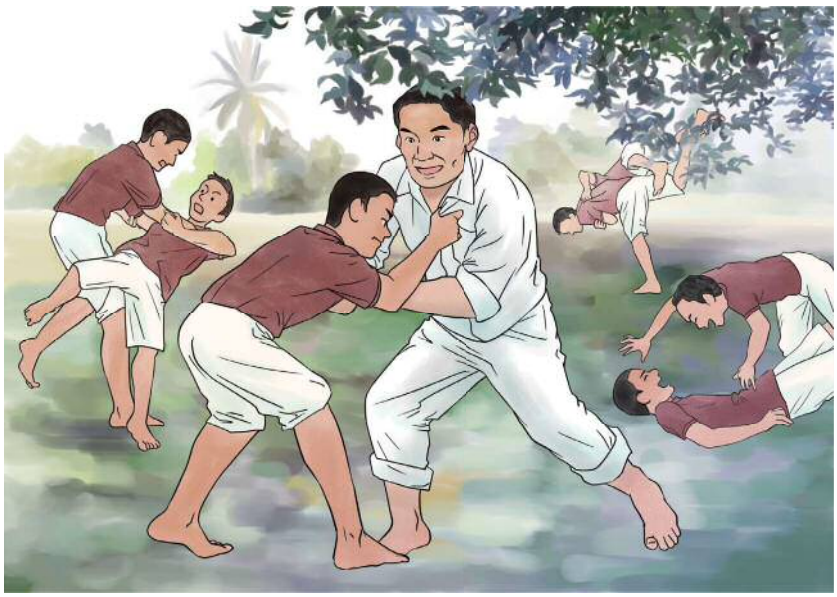
それで、僕は彼らに肥料の説明をしたいから、南拓の僕の部下である農業指導員たち17人に、教科書を作りなさいという宿題を出したんだ。そうしたら全員がまるで同じように、肥料には窒素、リン酸、カリがあって、これを肥料の3要素と言います、なんていう教科書を作ってきた。僕はその時指導員たちに言ったんだ。「お前たち、農民にこんな難しい説明をしたって農民は判るはずはないだろう。馬だって牛だって、お前たちだって食べ物を食べているだろう。だから稲でも麦でも同じように食べ物が必要だ。沢山食べるほど、馬も牛も大きくなる。その食べ物のことを肥料と言うのだ。そういう風に説明すれば、農民たちも判るようになる。」ってな。大学の法学部を卒業した僕が、農学部を卒業した指導員たちにそう言ったから、皆、なるほどそうか、と感心していたなあ。

そのオランダを日本軍が追い払ったあと、民間人の僕たちがゴロンタロへやってきた。日本の技術と力をもらって、自分たちはこれから発展するぞという希望と勇気が満ち溢れていたんだな。だから彼らの勉強の意欲もすごかったよ。

驚いたのは彼らの能力の高さなんだよ。日本政府の方針で、東光学園っていう学校を南洋拓殖が運営することになって、農学と一般教養と日本語を教え始めたんだけど、彼らは数か月で日本語を覚えてしまうんだな。それだけじゃない、日本語の講師をやっていた南拓の小川君という男が、日本の歌を唄って聞かせたら、彼らはその場でその歌を音符に書いて、翌日には楽器を弾きながらそれを唄ってるんだよ。びっくりしたよ。

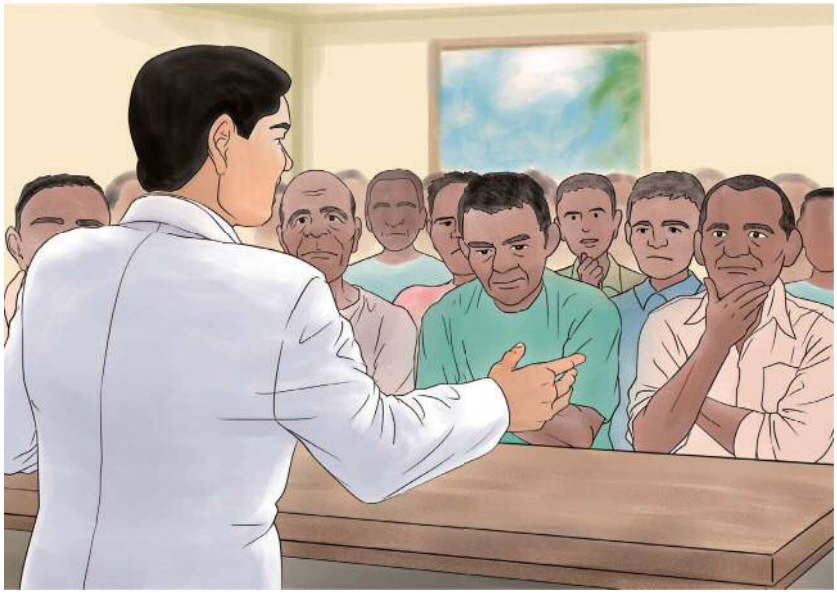


当時のゴロンタロには、まだ日本軍も日本政府の役人も来ていなかった。日本人は南拓の社員たち30人ほどだけだった。社員たちは皆若くて元気でたくましいし、一生懸命努力する姿を見て、現地の人たちは信頼を寄せてくれたよ。僕らは現地人の家族のためにも、生活や医療などいろいろと世話をした。僕は柔道の有段者だったから、休みの日は柔道も教えたりしたんだよ。



ゴロンタロ事業所の役割は、棉作りが主だった。僕は繰棉の工場建設を任されて、橋本君と平尾君が設計を担当したんだ。二人とも良い仕事をしていたよ。セレベスでは女性が外で働くことが珍しい時代だった。しかし、完成した繰棉工場では200人を超える女性たちが活き活きと働いていた。

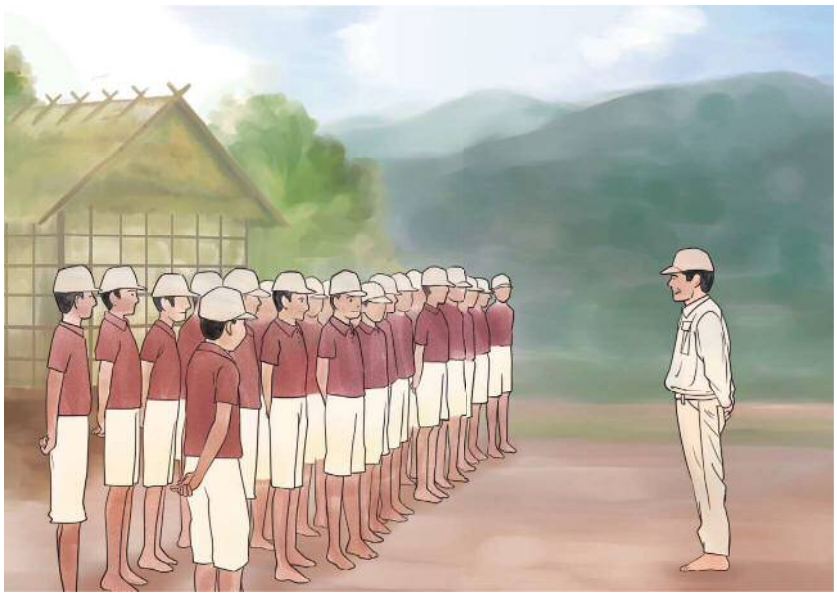
1年近くゴロンタロで仕事をしていたら、南拓が中部セレベスのポソに新しい事業所を作るから、そこへ僕が所長として行くことになったんだ。ポソに着いたのは昭和18年10月のことだ。



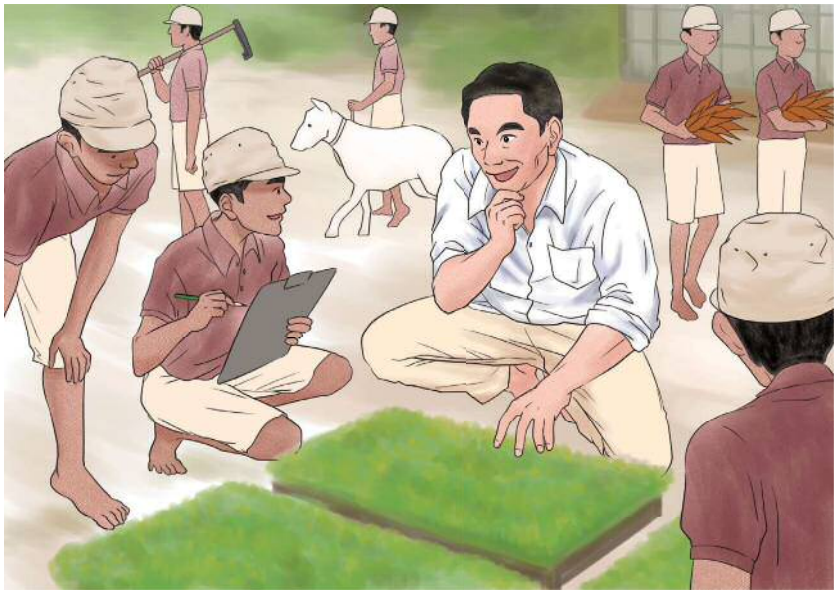
ポソ事業所の一番の任務は食料の調達だった。調達と言っても、米や作物を農民たちから無理矢理取り上げるようなことを僕はしたくなかった。だから僕は、郡長や村長達に集まってもらって言ったんだよ。「南洋拓殖は皆さんが持っているものを決して取り上げたりはしません。その代わり、今からポソで農業指導をするから、僕らが教えることをよく守って農業をやってほしい。そうすれば6か月後には収穫が必ず現在より3割増えるから、その3割増えた分を後で私たちに供出して貰いたい。」って懇切丁寧に説明したんだ。

そうしたらしばらくして、その農業指導の成果がまだ現れないうちから、今まで集まらなかった米が集まり始めたんだ。人々の信頼を得るにはこういうことが大切なんだよ。月島の幹部の皆はこういう考え方をしっかり自分の頭に入れておけよ。いいか。

そうして農業指導を始めることにしたんだけど、中部セレベスと言っても広いからな。僕が部下として連れてきた日本人の技術者はたったの6人だ。オートバイなんてなかったし、馬で回るしかない。それよりも、学校を作って優秀な農業のリーダーを育てた方が速いって考えたんだ。ポソ湖畔のテンテナというところに農業実務学校を開校したのが19年3月だった。各村から15歳前後の若者を村長から推薦してもらって、1期生60名からスタートした。南拓の農業技師たちが先生になったんだけど、僕だってマレー語が少し話せたから、農家経済の授業は僕がやったよ。「皆さんが頑張れば農家一戸の収入はだいたいこの位になって、生活費はこの位だから、この位残る。残った分をお金に変えて貯蓄しなさい。」そういう授業を僕はやったんだよ



種まきから収穫まで１期６か月の短期育成教育を始めた。月島の皆に僕がいつも言っているけれど、なんでもただ人から言われた通りにするだけじゃあ駄目なんだよ。自分自身の頭で良く考えることが大切なんだ。だから、２期生の60名からは、10㎡の土地をそれぞれに割り当てて、いろいろな種類の稲を比較させたり、植えつけるまでの苗床の期間は何日間が一番良いか、堆肥を使ったものと使わないもの、除草をしたものとしないもの、とか自分で考えて実験して、その経過を記録して、結果を村に持ち帰らせるようにしたんだ。その方が村に帰ってからの説得力があるだろう。彼らは本当に熱心だったな。朝から晩まで僕は彼らから質問を受け続けたよ。皆、しっかり勉強して村に帰り、この技術を広めるんだという気概に燃えていたんだ。農業学校を卒業した３期合計180人の若者たちは、その後村に帰って素晴らしい成果を上げたそうだ。



そうしているうちに、米軍の反撃が激しくなって、３期生の勉強が始まった20年４月には、ポソも敵の空爆を受けた。だから、日本が劣勢になっているってことは、当然村の人たちも分かるわけだ。しかし、僕らに対する信頼は最後まで揺るがなかった。８月に日本の敗戦を知らされて、いよいよ学校を閉鎖しなければならなくなったときはつらかったな。僕はこの若者たちに教えることがまだまだ沢山あるのにって思ったよ。捕虜収容所に向かうためポソから去った10月までの間は、入れ替わり立ち代わり村の人たちが来て、別れを惜しんでくれたんだよ。

僕たちは、ポソから南西へ300キロほどのマリンプン収容所という捕虜集結地へ向かったんだ。そこへの道中でも、現地の人たちは僕ら日本人に同情してくれたのかなあ、特に危ないことは起きなかった。日本へ送還されるまでの捕虜生活は５年ほどになるから覚悟しろと最初言われていたんだが、僅か６か月後に帰還命令が出た時は夢みたいだった。米国の復員船が配船されて、次の年の５月に帰国出来たんだ。敗戦国となった以上、自分たちにはこれからどういう運命が待っているのか、戦勝国の命令のままに生きるのか、などいろいろ考えながらリュック一つだけ背負って引き揚げてきたんだよ。

日本に引き揚げて来て、僕は大手メーカーの呉羽化学に就職したのに、セレベス島で共に働いた同志たちは仕事がないから食べていけない。橋本君や何人かの元南拓の連中を呉羽化学に推薦して入社させようとしたんだが、労働組合の反対があって実現できなかった。じゃあ僕は退職しますと言って、２年ほどで呉羽を辞めたんだ。呉羽を退職して今後どうしようかと考えていた時、橋本君が「橋谷さん、会社を設立してマーガリンを作れば何とか生活していけそうです。会社が安定したら南拓の仲間たちを呼びましょう。僕の義理の兄さんがマーガリンの作り方を教えてくれますから。」という話を持ってきた。そうして、橋本君と、元南拓社員の山田君と僕の３人で、23年の12月に設立したのがこの月島食品だ。最初の設立に必要な資金の大半は、叔父の青木に出してもらったんだよ。

ところが、操業して1年もたたないうちから、倒産の危機にあったんだ。当時マーガリンの原料は政府から割り当てられる方式だったんだけど、うちには割り当てがなかなかもらえなかった。原料がもらえないからマーガリンが作れないし、いきなり経営していけなくなった。

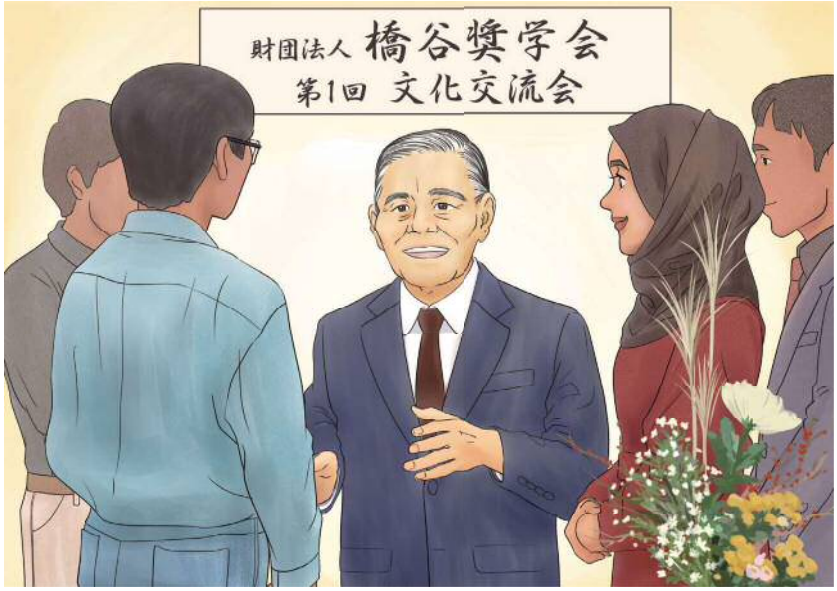
その窮地を助けてくれたのが、ゴロンタロで一緒に仕事した平尾君だった。彼は、僕たちが困っていることを知って訪ねて来てくれた。24年の12月だったかな。彼は当時政府の物価庁に勤めていたんだが、「貿易公団が輸出用の製図器を大量に余らせているから、それを月島食品に安く払い下げてもらい、全国に販売すればどうか」と提案してくれた。提案だけでなく、払下げのための政府への申請書類も作成してくれたし、橋本君と二人で全国の大学や文房具店へ歩いて販売までしてくれた。政府からの原料がもらえるようになった26年末まで、この製図器のおかげでうちは倒産を免れることができたんだ。

さて、今日皆に一番話しをしたかったことがある。そうやって始めた月島は、今では社員340名、生産量６万トン、販売額170億円にまでなった。僕は会社の創業者だけど、僕の後を継ぐ社長は、仕事ができるというだけでは、経営のかじ取りは難しいだろう。それなら財団を作って次の社長をバックアップしてあげたら良い。その財団は、企業が作るのでなく僕個人が作らなければバックアップにならないだろう。じゃあ、財団の収入となる配当金と利息等はどうするかと考えた結果、ゴロンタロ、ポソの住民の信頼に応えようと献身的な努力をした僕の若いころの思い出と、戦後30年余りにして今日のような高度経済社会を作り上げた日本の本質と教育の重要性に思い至り、インドネシアの留学生の学資援助に支出しようと決めたんだ。

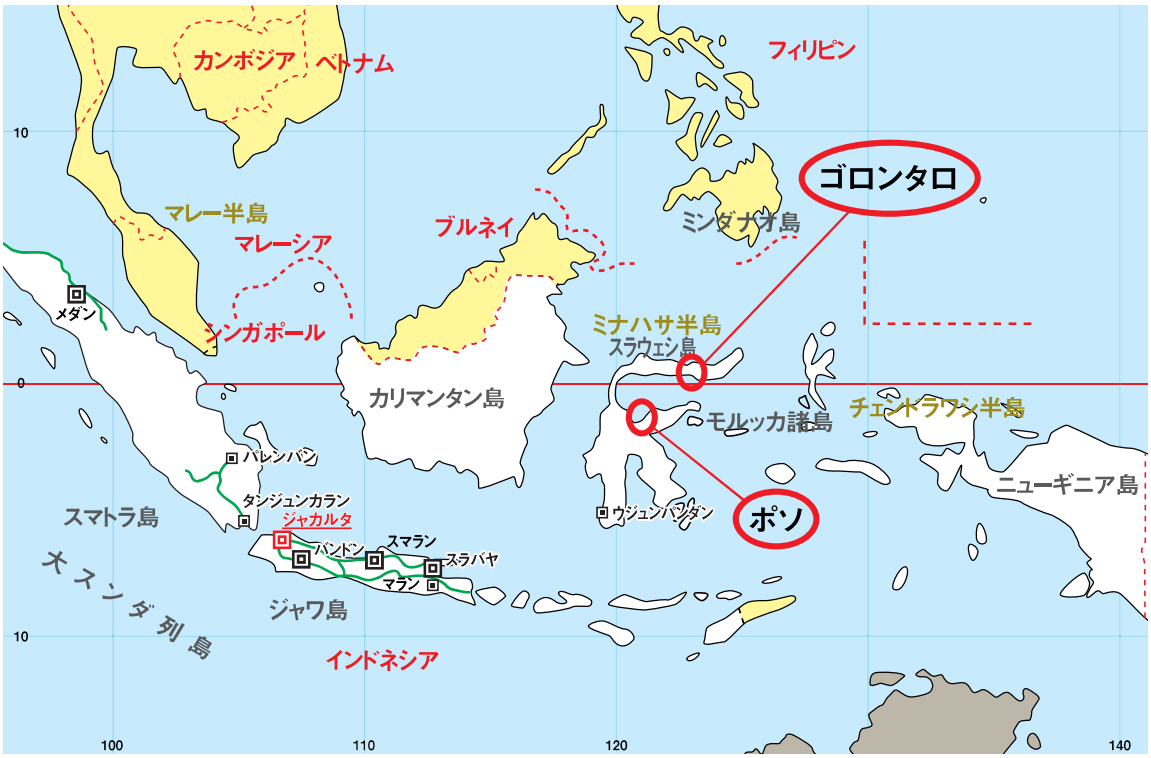
財団に僕が寄付する月島食品の株式100万株と現金１億２千万円は、毎年、株式配当金と利息を生み出すから、それで奨学金を賄えばいい。もし、将来月島食品が株式配当金を出せない年があっても、その時は会社でその分を寄付してほしい。財団を始めるということはそれだけ社会的責任が重いということなんだ。皆もそういう覚悟を持ってほしい。

（財団設立後、留学生たちとの交流会の場面で）

「留学生の皆さん。いろいろつらいこともあるだろうけど、頑張って勉強しなさい。そうすればインドネシアは皆さんの力で必ず発展する。インドネシアと日本の友好の懸け橋になってほしい。」



インドネシア地図



1942年９月ゴロンタロ赴任（南洋拓殖株式会社ゴロンタロ事務所業務課長）
1943年10月ポソ赴任（中部セレベス事務所開設、農業実務学校開設）

回想シーンに出てくる言葉の補足
TAMBAHAN KETERANGAN KATA

南洋拓殖：昭和11年に設立された国策会社「南洋拓殖株式会社（通称南拓）。」橋谷は昭和13年３月、東北大学法学部を卒業、翌４月に同社に入社。南拓の社員たちは「武器を持たずに南洋を開拓する平和の戦士」としての自負を持っていたと言われている

セレベス：現在のインドネシア共和国スラウェシ島。

ゴロンタロ：スラウェシ島北部のミナハサ半島に位置し、トミニ湾を臨む州。人口は20～30万人。マカッサル、メナドに次いで、セレベス第三の都市。住民は温順、親切で、好意的であった。本記念誌69ページ記載のボアレモ県はゴロンタロ州に属する。

肥料の説明：難しい化学的説明ではなく、「人も家畜も沢山食べれば大きくなる、作物にとってその食べ物を肥料という。」というシンプルな説明で農民を指導したのが橋谷の自慢であった。橋谷は法学部卒業、部下の技師たちは、大学で農業を学んだ者たちであった。

東光学園：南拓が日本政府の指示で、ゴロンタロに開校した日本語学校。日本語はもちろん、農学、一般教養も教えた。生徒は老若男女200人を超えたという。講師の小川良夫氏(1922-2012)が生徒に懇願されて日本の歌を唄ったら、生徒たちはたちまち音符をつくり演奏し唄っていたと言われている。同氏は、南拓の一員としての現地での体験を様々に記録し、帰国後多くの貴重な著書を残している。

柔道の有段者：橋谷は、旧制水戸高校から東北大学を卒業するまでの７年間、柔道競技で活躍した。四段であった。毎月８日には、ゴロンタロの人たちに柔道の型を披露していた。

棉作り：南拓がゴロンタロで最初に取り組んだのは、棉作であった。橋谷は操棉工場建設の責任者として、後述する橋本、平尾とともに、ゴロンタロの岸壁に1,600坪の操棉工場、製品倉庫、付帯設備を建設した。

橋本君：橋本安良氏（1919-1960）は昭和18年南拓に入社。帰国後、橋谷と共に月島食品を創業した。創業後の最初の危機では、足を棒にして製図器を売り歩き、統制解除後は、江戸川区から東北地方に至るまでマーガリンを販売。常務取締役営業部長として、販売力、企画力を存分に発揮していた昭和35年８月26日、心臓の病に倒れ突然帰らぬ人となった。

平尾君：平尾文雄氏（1918-2011）は、昭和18年に南拓に入社。橋本と同期生で、帰国後、政府の物価庁に勤務。月島食品の創業後の倒産の危機を救い、橋谷、橋本を助けた。

食糧調達：南拓ポソ事業所長の橋谷は、日本軍のために食糧を集めるよう命令されていた。橋谷は、まず地元の信頼を得ることを優先して、地元の発展のために尽くせば、必ず食糧を提供してもらえると考え、郡長、村長たちに集まってもらい、丁寧に話したところ、今まで日本軍が集めようとしても集まらなかった米が、橋谷のところに集まり始めた。月島の幹部たちに、「人から信頼を得るためには、まず誠意を示すことだ」と常に教えていた。

農業学校：種籾をまいて、苗を育て、田に植えて、収穫するまでおよそ６か月。青年たち60名にこの６か月のカリキュラムで指導し、１年６か月で３期180人が指導を受け卒業した。

マレー語：現在のインドネシア語とほぼ同じ現地語。南拓の社員は皆、日本でマレー語を習得し、現地に着いても勉強をしていた。橋谷もマレー語で青年たちに貯蓄の大切さを教えた。

自分の頭で：「何事も自分の頭で考え、研究しなければ、身に付かない。」というのが橋谷の教え。日本軍の将校がポソに視察に来た折、喜んで勉強している青年たちの姿を見て、「さすが南拓だ」と褒めたと言われている。

捕虜収容所：戦争に敗れて武装解除した兵隊と民間人は、各地の捕虜収容所に集められた。橋谷たちは、ポソの南西300キロにあるマリンプン高原の捕虜収容所に向かった。

帰還命令：５年間ほどの捕虜生活を覚悟していたが、米国の輸送船リバティ号が大量にセレベスへ配船され、橋谷たちは予定より早く帰国することができた。

呉羽化学：橋谷は、帰国後すぐ、戦時中南拓の理事であった呉羽化学の社長との縁故で呉羽化学に職場を得た。橋谷は、セレベスから帰国し職が得られない何人かの同志たちを、何とか救ってやりたいと、同社に斡旋したが、労働組合の反対に会い、実現できず、昭和23年９月、同社を退職した。

統制経済：戦後もしばらくの間、国家は国内の経済活動を統制し組織化していた。マーガリンの原料と生産量も政府からの割り当て方式であったが、この割り当てを狙って次々と新設されたマーガリン工場は110社にも及んでいた。その中でも、最後の方で割り当てを申請した月島食品には、昭和25年の原料割り当ては、僅か3,100キログラムであり、いきなり開店休業の状況に追い込まれていた。

製図器：政府は外貨獲得のため、輸出の見込のありそうな製品を買い上げ貿易公団が保管していた。その中で輸入の引き合いがないままの大量の製図器が政府の倉庫に眠っていた。

経営のかじとり：橋谷は会社の創業者で筆頭株主であった。しかし、後任の社長は大株主ではなく、いくら優秀でも、部下たちが言うことを聞かないのではと心配し、橋谷は自分の持っている月島食品の株式を奨学会に寄贈して、奨学会が新たな大株主となり、後任社長がその奨学会の責任者になれば、大株主と同じ力が発揮できると考えた。

財団を守る覚悟：奨学援助という極めて公益性の高い財団を設立した以上、その永続は重要な社会的使命である。橋谷は、財団が困難に遭遇しても月島食品が支援することを願い、幹部達にその覚悟を説いた。

あとがき

橋谷亮助には二つの大きな志がありました。一つは、協同経営理念の実践でした。

茨城県真壁郡上野村（現･筑西市）の農家に生まれ育った橋谷が旧制中学校に通っていた頃、昭和の金融恐慌が発生しました。はなはだしい不況に加えて上野村は２年続きの旱魃に遭い、どの農家も貧乏に追い打ちがかかった状況でした。旧制中学４年の夏休み、柔道の練習が終わった後、橋谷はお茶を飲みながらこんな話をしていました。

「農家が一戸一戸別々に百姓をしているのは如何にも不合理だ。いっそのこと各自の土地を役場へ集めて協同作業にすればいい。そうすれば農道にしても水路にしても真っ直ぐに出来るし、耕地の区割も１町歩くらいにすると作業効率も良くなる。農機具も一戸一戸別々に持たなくていい。それに養蚕にしても、煙草にしても分業化出来る。土地を提供した地主には『農地証券』を渡し、小作料ほどではないとしても地代を払い、働いた分に対しては元地主、元小作人の区別なく賃金を支払うことにすれば、上野村は一つの協同経営体となり、今より大分良くなるんじゃないだろうか。」

この考えは、あまりに革命的ととられた上、橋谷自身が受験勉強で忙しくなり、その後水戸高校から東北大学へ進んだこともあって実践には至りませんでした。

それから30余年後の昭和38年、月島食品は生産高、販売高も増えて、資本金を増資することになりました。この時点で橋谷は、30余年前に考えた農村の協同企業化「農家が土地を出し合う協同の経営形態をとれば、みんなが生きていける」という構想を月島食品で実現してやろうと決心しました。会社が目標以上の利益を出したとき、その利益を社員に配分して社内預金とし、それを蓄積して増資の度に社員が自社の株を購入しました。資本を社員で持つことが協同経営理念の最大の特徴であり、全員で働いて得たものを、資本に対しては配当、労働に対しては月給・賞与の形で配分し、会社の安定を期すための資本蓄積は別途積立金として考慮されました。資本金６億４千万円の大企業でありながら、現在も発行株式の過半数を現役社員が所有しており、橋谷の協同経営理念が受け継がれています。

橋本安良（左）橋谷亮助（右）
月島食品工業株式会社
月印マーガリン謝恩観劇会にて
（昭和33年　歌舞伎座前）

そして、もう一つが、若き日に志半ばで断念した「インドネシアの若者たちへの教育支援」でした。橋谷が他界してから29年の月日が流れ、橋谷を知る人が少なくなった今こそ、この志の所以を一人でも多くの方に知ってもらいたいと考え、本誌中に橋谷の回想として多くの紙面を取らせていただきました。挿絵の制作にあたっては、当時の服装、風景などを再現するため、元南洋拓殖社員のご遺族の方々にご協力をいただきました。とりわけ、貴重な資料をご提供いただいた橋本アサ子様、平尾文昭様、南部則子様、浅川津也子様、そして、財団設立時より今日に至るまで多大なるご支援をいただいておりますインドネシア大使館の疋田弘子様にはこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。また編集にあたってひとかたならぬご尽力をいただいた幸書房の夏野雅博氏にも感謝を申し上げます。

2022年５月　橋谷奨学会設立40周年記念誌編集責任者　塩谷隆則